

遺構が語る生きた記憶

明治6年5月に創設され、長い月日、多くの人で賑わう町を記憶し見守り続けてきた門脇小学校。大震災の翌日、学校が記憶する風景は、薄曇りの空と焦げくささが漂う灰色の世界だった。辺りは静まり返り信じ難い光景が広がっていた。一夜にして町は廃墟となってしまった。

旧門脇小学校の震災遺構が私たちに問いかけている。大地震と大津波の恐ろしさ、風向きが変わるたびに、まるで生き物のように襲いかかり辺りを焼き尽くそうとする炎の恐ろしさ、火災が残した^{むご}惨たらしさの意味を。そして避難することを^{ためら}躊躇わない心の強さをもつことを。

日頃から防災・減災を意識して生活することの大切さを忘れてはいないだろうか。地震が起こったなら、すぐさま高いところへ避難する行動力を身につけているだろうか。とっさの判断が命を守る。自然の恐ろしさの前に、人間は無力であることを大震災で身をもって知ることとなった。私たちは自然に抗うのではなく、自然と共存することの意味を理解し伝えていかなければならない。

それは、祖先がこれまで築き上げてきた生活の知恵や、伝え継がれてきた歴史の記憶を受け継ぐことであり、これから先も変わらない私たちの営みや暮らしの風景を記憶として紡ぎ続けることである。

たとえ、震災により街の景色が変わってしまったとしても、これまで築き上げられてきた地域の姿は私たちの記憶に紡がれており、言葉にして伝え続けていくことができる。そして目にした情景や体験の記憶は語られることで生きた記憶となり、この地で生まれ育ってゆく、未来のいのちを守ることへ繋がっていくのだ。

そして、旧門脇小学校は、遺構となってもなお、これまでと変わらず人々の日常を見守り続け、避難の大切さ、命の大切さを語り続けていこう。日常を日常として過ごせることの幸せや、今を大切に生きて欲しいという言葉添えて後世へと語り続けていく。